



工高タイムス

北海道旭川工業
高等学校新聞局
〒078-8804
北海道旭川市緑が丘
東4条1丁目1-1
発行人(局長)
村岡 良祐
(工業化学科3年)

来年度から新制服導入 学ラン・セーラーからスーツに

来年度の1年生から新制服になることが、9月17日の生徒会役員選挙のあいさつで中島泰彰校長先生から説明があった。新制服は10月4日の中学生体験入学で披露された。



新しい制服 左がAタイプ、右がBタイプ

新制服は上下そろいのスーツ。色は黒に近いグレーで、生地にはグレーと紺、エンジの3色が織り込まれており細かな技術が見られる。新制服はスーツにネクタイが基本だが、本人の希望でスカートや、ネクタイと同じ柄のリボンを選ぶことができる。大きな特徴としては、素材が高い機能性を持ち、防シワ、はっ水、保温、軽量、帯電防止に加え、家庭での洗濯もできることだ。胸に付けるエンブレムも旭工にふさわしいものとなっている。

る。新制服導入により、旭工の伝統だった男子は学ラン、女子はセーラー服という制服は現在の1年生までとなる。制服のモデルチェンジを担当した生徒指導部の澤田誠司先生に話を聞いた。

制服を変更する理由は「現在の社会の流れから制服にもジェンダーレスを考え、男女とも同じデザインにする」ため。今年に入って、制服メーカーから出されたいくつかの



部長の金川君(土3)

バスケット選手権

地区予選で準優勝 悔しさ踏み台に全道へ

バスケットボール部は9月13～15日に旭川東高校と旭川南高校で行なわれた北海道高等学校バスケットボール選手権大会旭川地区予選会で準優勝し、全道大会出場を決めた。全道大会は11月7～9日に室蘭市で行なわれる。

部長の金川流輝君(土3)は「前回の大会に比べて相手

がディフェンスで圧をかけてきたが、それに引っかけからなかったのが良かった。旭工に悪い流れが来たときすぐに断ち切ることができず苦戦した。地区大会に向けてディフェンスでの立ち回りをチームで確認をしながら練習してきた。2位という成績でも悔しかった。全道大会では悔しい気持ちで踏み台にして頑張りたい。全道大会に向けて、実際の試合を想定して5対5の

バレー選手権

地区優勝で全道へ 練習試合で課題解決



部長の今琉聖君(化2)

バレーボール部は9月28～29日に旭川西高校で行なわれた全日本バレーボール高等学校選手権大会旭川地区予選会で優勝し、全道大会出場を決めた。全道大会は11月4～6日

に札幌で行なわれる。

部長の今琉聖君(化2)は「決勝戦ではギリギリの試合になったが、チーム全員が協力して勝った。チーム全体でレシーブが苦手だったり、大事なときにサーブミスを多くしてしまうのが改善点」と話した。また、全道大会に向けて「3年生が最後の大会なのでチーム皆で最後まで挑戦し、ベスト4を目指す。練習でレ

試作品を比較して、制服検討チームの先生方で話し合い、最終的に職員会議で決定した。澤田先生は「新制服導入が

決まったとはいえ、生産が入学式に間に合うのか、価格が高くならないかなど心配は尽きない」と語った。

★旭工 ライフ

難しい類は一つずつ 危険物乙種全類を取得 村岡良祐君(化3)



趣味はゲーム

危険物取扱者乙種全類を取得した。一つも不合格にならずにすべて取得できたので良かった。取得しようと思ったきっかけは2歳上の兄が高校を卒業までに危険物取扱者乙種全類と甲種を取得していたので、そのような資格取得に頑張っ取り組んできた兄の姿に憧れて、私も勉強しようと思った。

うと考えた。

私は最初に乙種第4類を受けた。その後、乙種第1、2、5類を同時に受験し、残りの乙種第3、6類を受験した。反省点は、まだ勉強をしていないときに、難易度を知らないまま難しい類を複数受験してしまい勉強が大変になったこと。

後輩へのアドバイスは、この中でも乙種第1、5類は特に難易度が高いと感じたので、乙種第1、5類はできるだけ一つずつ受験して、残りの類は複数受験で取得していくのが良いと思う。



新部長の藤原君(機2)

バスケット大会 バ秋季

新チームで準優勝 結束力を高め新人戦へ

バスケットボール部は10月11～13日に旭川志峯高校と旭川実業高校で行なわれた旭川支部高等学校バスケットボール秋季大会で準優勝した。

藤原伶士新部長(機2)は

「優勝できるチームだと思っているので準優勝には納得がいかない。大会では試合の流れが悪いときもチーム皆で声を掛け合うことができた。相手の1対1を止めるディフェンス力の不足や、全員でリバウンドに入る意思の弱さが反省点だ」と語った。今後は「個人のスキルアップやチームとしての結束力を高めて新人大会に臨みたい」と意気込んでいる。

生徒会役員再選挙
2役職が決まる

生徒会役員選挙後に、立候補者がいなかった2つの役職の再選挙が行われ、9月29日の結果が公示された。

生徒会誌編集委員長
今西 孝太(電1)

行事委員長
下村 夏輝(建2)

先日、横江美莉亜先生から茶道部の取材のお礼として茶道体験に招待された。茶道には流派があり、大きく表千家と裏千家、武者小路千家に分かれる。茶室への入り方、菓子の食べ方を学んだ。作法は正座に慣れない私にはとても辛かった。しかし、お互いが気持ちよくお茶を楽しめるように配慮しあった結果、できた作法が文化として成立したもの茶道なのだと感じた。横江先生から一通りもてなされ、実際にお茶を点てる体験をした。お茶を入れる前に冷えないために事前にお湯で茶碗を温めてから、改めて茶を入れるという粋な計らいの工夫を知った。日本人は謙虚な人といわれるが、相手を大切にする精神が謙虚となっていて表れているのだ。先日、放課後に友人と蜂屋の五条創業店へラーメンを食べに行ってきた。寒い中雨に打たれながら入った店は温風と店員のあいさつが迎えてくれた。この店では焦がしラード入りのラーメンが有名だ。油が熱を逃がさないため、ずっと熱々のラーメンを食べられる。おすすめはチャーシュー醤油ラーメンだ。やわらかいチャーシューにスープが浸み込み、載っているしょうがを絡めて食べると最高においしい。▼本当は寒くてもはちみつアイスを食べて帰ろうと思ったが、季節限定だった。生徒の皆さんもぜひ行ってみたいかがたろうか。本店は15時頃までと営業時間が短いので、気を付けてほしい。

(電2稲留)



第39回日本工業大学建築設計競技

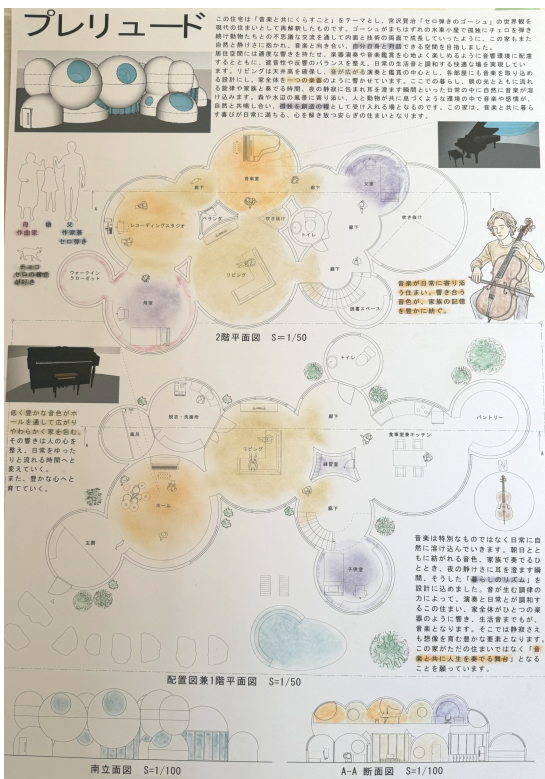
山本君が奨励賞に
音や光と人の気配が調和

受賞を喜ぶ山本良太君(建3)

建築科3年の山本良太君は第39回日本工業大学建築設計競技で奨励賞を受賞した。全国から40校が参加し、80作品の応募があった。競技は「宮沢賢治の物語の家」という課題で設計を行なった。

山本君は「全国規模の建築設計コンペティションで、自分の力を試したいと思い応募した。建築作品図面は約3か月かけて完成させた。タイト

ルは『プレリウド』で音楽の始まりという意味だが、1日の始まり、人生の始まりという思いを込めた。音や光、人の気配が調和するような空間を形にするのは難しかったが、審査員がその意図を感じ取ってくれてうれしかった。入賞できたことは黒川朋寛先生と笠木元太先生のアドバイスのおかげ。先生方の支えが



山本君が作成した「宮沢賢治の物語の家」

あったからこそ頑張れた。この経験を励みに、これから心にも響く建築設計をしていきたい」と語った。

新聞全道

分科会で運営を担当
貴重な体験と多くの学び

新聞局の7人は10月8〜10日に網走市で行なわれた。第69回全道高等学校新聞研究大会に参加した。大会には全道から39校生徒235人が参加し、新聞発行の意義や制作技術を学んだ。

大会1日目は開会式の後、記念講演で網走市農林水産部水産漁港課課長の渡部貴聰さんが「オホーツク・網走あな

『ゴージュの家』を選び、建物のいたるところに音が響き渡る家をデザインした。たどり着いた形が球体の連続した空間で、3次元の曲線同士の間、収まりが組み合わされず3Dを作るのに大変苦労していたが、受賞につながって良かった」と話した。



班で討議をする村岡君(右奥)

に分かれ、他校生と交流しながらテーマに沿った活動を行なった。3日目は全体会で各分科会で行なったことを代表が発表し、各分科会の内容を

全道高等学校新聞研究大会の閉会式後に全道高校新聞コンクール表彰式が行なわれ、旭工新聞局は手書き・ワープロ部門で11年連続12回目の総合賞(最高賞)を受賞した。

12回目の総合賞

旭工生の協力のおかげ

局長の村岡良祐君(化3)は「日頃の部活動での努力が認められ、とてもうれしい。このように普段から新聞の制作活動ができるのも旭工生がものづくりや大会などで活躍し、取材に協力して

極的に取り組んでみたい」と話した。

参加者で共有した。新聞の全道大会では分科会がメインとなる。今年の分科会は当番のオホーツク支部内の参加校が2校のため、8分科会の運営は困難なので各分科会を各支部で受け持つこととなった。上川支部はI A分科会を担当することになり、旭工の村岡良祐君(化3)と小西輝君(電1)、旭川永嶺

高校の松野雅さん(2年)と山口紗来さん(2年)が運営を担当した。

小西君は「初めての全道大会で分科会の運営を担当し、まだ1年生で学ぶことがたくさんあるが、貴重な体験をすることができて良かった。話し合いで他校の新聞の書き方や悩みなどを聞けてとても勉強になった」と語った。

特集
戦後80年⑤やせた人は帰国を許されず
戦争はもうこれで終わりに

8月16日貨車で興南に移った。兵隊は移動するたびに多数の死者が出た。朝、目が覚めると右の弱

兵も左の弱兵も死んでいた。そんなことがたび重なり人の死に對しては不感症になっていた。たまり

かねた軍医が皆を集めて「今の医学ではこの病気に必ず効くという薬は二つか三つしかない。お前

ちの体はお前たち自身が治すのだ、医者はただそれを助けるだけに過ぎない」と宣言した。薬は何もなかった。

興南には収容所や病院がいくつもあり転々とした。最後に来た収容所である日、坊主頭に軍服を着た芸者が飛び込んできてうわさになった。隣に寝る兵隊をうらやま

しがあったが、しょせんは「宦官(かんがん)」同様の弱兵ばかりであった。演芸会で聴いた三味線の越後獅子には故郷をしのび万雷の拍手が鳴りやまなかった。

翌22年1月待望の帰国船がきた。が、あいにくのマリアで見送った。3月第2船がきた。これに乗らなければソ連が北朝鮮から引き揚げるため、ナホトカへ戻されることになっていた。ソ連の女医の前を歩かされた。そしてハネられた。シベリアに行くときハネられたのは分かるとしても、何で帰国

日本の島影に感動

「国破れて山河あり」船上から日本の島影が見えてきたとき、甲板は兵隊であふれた。眼に熱いものが込み上げてきた。「九死に

生」を得て故国の土を踏める喜びはとても言葉に表現できない感動であった。そしてかの地に果てた多くの戦友を思うとき、涙のつたわるのを止めることができなかつた。

故国を目前にしながら船中で亡くなった兵隊を看護婦が甲板に抱いてきた。「ごらんささい、あれがあなたの故国です」といつ泣いた。皆泣いた。

私たちを乗せた大安丸は3月23日佐世保に着いた。

戦争はもうこれで終わりにしたい。それが人間の英知というものではなからうか。(おわり)